

# 地区共闘の組織化で安保粉碎へ総進撃を！

〔1〕69年に発表された「日米共同声明」は70年代階級闘争が新しい階級に突入したことを全人民の前に明らかにした。現在進行している帝国主義的社会再編が沖縄においては米軍基地の再編強化と、それに基づいた全軍労に対する大量首切り、レッド・ページとして開始されている。また「第四次防衛計画」に見られる通り72年から開始される海・空軍の軍事増大強化が進められている。そのことは日帝の東南アジア進出に向けて、沖縄に自衛隊の派遣が行われようとしていることを意味する。これが日帝の総路線である。すなわち、沖縄は日帝の侵略・反革命の基軸であることを端的に示している。また日本のあらゆる産業界、市民社会、大学等において日一日として、帝国主義的社会再編が全国学園闘争、職場の反帝闘争にもかかわらず、進行し、ブルジョアジーによって集約されようとしている。我が明治大学においても、昨年の6月以降「大学立法粉碎」「明大闘争勝利」のスローガンのもと、闘いが展開された。そして昨年10月9日の機動隊導入に象徴されるように国家権力と大学当局による癒着を媒介として帝国主義的社会再編、学問統制が行われようとしている。このような欺瞞的な大学当局を弾劾し、国家権力に対する闘いが問われている。明治大学の学友諸君に対して、本年の「和泉祭」は権力と癒着した大学当局を弾劾する催し物の一つであることをアピールしておきたい。

〔2〕67年10・8羽田闘争～日大～東大闘争、「国際主義と組織された暴力」による67年10・8羽田闘争が全人民的政治闘争として革命的に闘われた。その質を受けついで日大～東大闘争へと発展、飛躍して行った。もちろん日大～東大闘争一つを取り上げてはたかだか学園闘争に過ぎない。しかしその個々のバラバラな医療制度問題、学生問題等々として闘われた闘争が、明確に帝国主義政治機構の再編として行われていることを暴露するや否や、それが「大学解体」「古田体制打倒」への闘いへと高揚し、深化して行った。そして日本の階級闘争に画期的現代史として付与していった。

〔3〕大学立法粉碎～昨秋10・11月闘争、東大闘争が示す通り、そこには60年代後半に存在して来たノン・セクト・ラジカルな運動体とこれまでのボツダム自治会方式を乗り越えようとする運動体として、全共闘運動は形成されて行った。全国のあらゆる学園において、また明治大学においても同様に形成されて行った。明大全共闘の形成過程は直接的に大学立法を媒介として結成されて来た。つまり学園闘争の高揚と階級情勢一般に規定され

政経学部闘争委員会

BUND

講演 日向 翔

米田隆介（元全学連書記次長）

中村 進（東大闘争被告団）

5月31日 PM 4:00 1 番教室

ていった。全国のあらゆる地域、学園に形成された全共闘運動は権力の先行的攻撃によって（明大では昨年10・9の機動隊導入＝ロックアウト体制）武装解除されていった。そしてその大衆武装を生命力とした明大全共闘はその段階において新しい武装の質を要求した。その新しい武装の質を見い出せないまま、昨年の10、11月闘争は敗北していったのだと考える。かかる段階において、明大全共闘の間われている点の一つには全共闘運動が如何にして新しい武装の質を大衆的に獲得して行くかという点と、もう一方産業別運動を乗り越えた地区共闘の運動を労働者と何を軸として結合して行くのかが問われている。その問題を解決する任務を設定することが最も重要だと考える。

〔4〕政闘委の現在の任務、まず第一の任務は大学当局においてなされている欺瞞的正常化策動＝ロックアウト＝授業再開を断固阻止し、闘いを学園内に組織して行くこと。第二に産別運動を乗り越えた運動を具体的には労働者と学習会、討論会、情宣活動を通じ、堅く連帯し、階級闘争における地区共闘を組織して行くこと。このことが、正に我々に問われている現在の任務である。我が政経学部闘争委員会はこれらの運動を率先して闘い抜くことを堅く決意表明すると同時に、全ての学友諸君に6月安保をさかんに闘われんことを強く訴えたい。

祝 和 泉 祭

アルバイト歓迎

**ITO 伊藤製パン**

墨田区亀沢1-22-9

Tel (622) 4121